

アメリカ民主主義の行方

第一生命保険 特別顧問 森田 富治郎

今月もトランプ大統領とアメリカ政治の問題について考えたいと思います。対話と議論から社会の方向性を定めてゆくというのが民主主義政治の根本原則です。それによって、国民の持つ多様な価値観を調整し調和させて、国の方向性や政策の統一性を定めてゆくということです。トランプ大統領の政治姿勢は、特定の価値観を腕づくで押し通そうとしているように見えます。大統領就任以来、国民の意見対立を巻き起こすような大統領令を連発してきました。特にイスラム教7カ国からのアメリカ入国一時禁止はアメリカ国内及び海外に強烈な反響を呼び、地方裁判所、控訴裁判所を通じて差し止めを命じられることになりました。

大統領選挙中から国内外の驚きや不安を巻き起こしたのは、様々な課題について従来の価値観を覆す過激な主張を展開してきたことですが、「大統領になれば、現実的な方向に修正されるだろう」という少なからぬ予想に反して、大統領就任後も世の驚きと不安は継続されることになりました。

トランプ氏の言動の背景を冷静に見れば、諸々の主張にアメリカの抱える問題点が反映されていることは否定できません。中間層の没落、増大する所得格差、それらの背景として認識される、移民による労働市場への影響、貿易問題等。しかし、いずれの問題も、今日の状況に至るまでの歴史的な経緯と、事態の進行の過程で繰り広げられてきた様々な軋轢と議論を無視しては、部分最適しか見ない議論の横行する、激しい混乱や無秩序を生み出すことになるでしょう。

トランプ支持層の共通の心情と思われるものに、自分たちの抱えている強烈な不満を、既存の政治が解決してくれないという閉塞感、それと同根と思われる、エスタブ

リッシュメントへの強い反感があるように思われます。確かに、上記のような諸問題に対して、対話と議論を重ねて全体最適を求めるという民主政治の理念、その根底にある、「社会現象の元に常に存在する、正と反の対立を克服或いは止揚して合を求める」という弁証法的要請に対して、「反」への気配りと問題解決の努力に欠けるところがなかったかという反省は必要ではないかと思えます。

その反省は反省として、部分最適の過剰な追求、ジグソーパズルの一部のピースの拡大のあまり、全体の画像の完成が不可能になるという事態は避けなければなりません。それに対するアメリカの政治システムはかなり強固に作られていると思います。つまり、行政、司法、立法の三権分立が強固に守られているということです。冒頭の、イスラム教国からの入国禁止に対する裁判所の判断、閣僚や政府高官の任命に対する議会のチェック、それが影響した人事の停滞といった形で、大統領の独走に対する牽制は既に現実化していますし、今後の経済政策や予算の具体化に対し、議会がどういう対応を取るか、これも大いに注目されているところです。アメリカの三権分立の強固さの根底には、「大統領が常に誤りを犯さない存在であるとは限らない」という思想があるとされています。

2月28日の大統領の議会演説では、それまでの挑戦的な姿勢からかなりトーンダウンした、国内融和を求める姿勢に変化したように見え、これは多くのメディアからの評価も高かったようです。大統領選の最終得票で、クリントン氏を二百数十万票下回るといふ深刻な国内分断状況を放置したのでは、アメリカ政治が健全に遂行されるとは思いません。

対話と議論に基づく健全な民主主義政治の遂行を心から願うものです。